



東日本大震災から1年6カ月が経った現在、不明者は2,814人で死者15,870人、震災関連死の1,632人を含めると2万人を超える犠牲者の数になった。8月29日、内閣府中央防災会議が東海から南九州沖を震源域とする「南海トラフ巨大地震」の被害想定を発表した。マグニチュード9・1で静岡県から宮崎県までの10県151市町村が震度7との超巨大地震である。20m以上もの津波に襲われる地域が8都県に及ぶらしい。

逃げることに最善をつくせ

— 東日本大震災と片田教授から学ぶこと —

情報広報部

橋本 洋一

最悪の場合、死者の数が東日本大震災の18倍もの、32万と想定されるとのこと。

こういった想定を受けて、災害アドバイザーとして釜石市で防災教育に取り組んでこられた群馬大学の片田敏孝教授に講演を依頼すべく電話を入れたが、来春3月末までスケジュールがいっぱいで10月以降に再度連絡してほしい旨の返事を女性秘書からいただいた。

岩手県釜石市では小中学生の99・8%が自

らの命を守りきったことが「釜石の奇跡」としてマスコミ等で取り上げられ話題になった。しかし、当事者である釜石の小中学生にはその言葉に違和感を覚え、馴染まないものにみえた。片田教授は学校の先生方の協力を得て、津波避難3原則を先入観や偏見にとらわれていない小中学生に叩き込んだ。

その津波避難3原則は『ハザードマップを信用するな(想定にとらわれるな)』『最善を尽くせ』『最初の避難者になれ(率先して避難せよ)』である。片田教授はこの3原則の中で最も重要な原則は『最善を尽くせ』

であると述べている。最善を尽くすという姿勢を取れば、行動が主体的になり、自ずと想定にもとらわれなくなる。片田教授の教えを順守し、隣接する小学校の生徒達を引き連れ、諦めていた親やお年寄りにも避難することを呼び掛け、多くの大人の命が救われた。当初は大丈夫だと思われていた避難所を捨てて、さらに高い避難所を目指して難を免れたことを心から喜びたい。《自分の命は自分自身で守る》という基本的な防災意識が「釜石の奇跡」を起したのである。

避難生活を余儀なくされている人々がまだ34万人にも上ると新聞に書かれていたが、ストレスがたまり、子供達にイライラ感をぶつ

ける《子供への虐待》に類似した行為が時折みられるらしい。本来、子供のことを中心に考えての避難生活の筈のだが、子供を虐待するという本末転倒の有様は決して許されることではない。こういった長期の避難生活から心が疲弊した人々にメンタルヘルスの観点からサポートする体制の構築が急がれる。

いじめで自殺する小中学生が200人にも上がり、大津市の中学校でのいじめによる自殺事件で事実を隠蔽していた教育委員会の姿勢が問題になったが、一方で委員長にハンマーで暴行をふるう短絡的で自分勝手な正義感を振りかざす大学生の愚かな行為にも驚かされた。いじめも子供虐待も犯罪であり、この両者から自分の身を守るための方法をお子達に叩き込まなければならぬ。いじめや虐待に対峙することを教えるのではなく、そういった卑劣な犯罪から逃げる実践的な知恵を教えることが人生の先輩である大人の役目でもある。《自分の命は自分自身で守る》という考えを身につけてこそ、津波にも、いじめにも、そして虐待にも負けない自分自身を自己確認できるのである。

子供たちよ、人間の力を超えた自然災害からも、卑劣な数を頼りにしたいいじめからも、そして理不尽な親の暴力からも逃げることに最善を尽くそう。その先に君達が生きていてよかったと思える未来が必ず待っているのだから。